

ランニングクラブ「セカンドウィンド AC」のビジネスプラン

スポーツマネジメントコース

5007A328-1 比嘉正樹

研究指導教員： 間野義之准教授

(クラブ設立の背景)

これまで、日本のスポーツ界や陸上長距離界において、その活動に対しては企業が母体となり、実業団として活動するのが一般的であった。企業の垣根を越えて、日本のトップ選手と日本を代表する指導者による、自由参加型ランニングクラブの存在はあまり例がなかった。

こうした中、実業団の指導者として2005年の全日本実業団駅伝日本一を達成した、川越学氏率いる『セカンドウィンドAC』という新たなタイプのランニングクラブチームが、2007年4月より東京代々木公園を拠点に活動を始めた。

ランニングを中心としたクラブチーム『セカンドウィンドAC』誕生の背景には、様々な要因が考えられる。まず、スポーツ界全体にみられるが、企業スポーツとして抱える問題や社会的要因、そして“Running Life”をエンジョイしたいと思うランナーが増えてきたことが背景にあると考えられる。

(研究目的)

これまで、陸上競技の長距離において競技力を高めるには、高校までは部活動、大学は競技部、社会人は実業団などに進まなければ、そのチャンスがないというのが現状であった。しかし、陸上部がないといった事情や、実業団の選手になれなかった選手にも、優秀な指導者が指導するほうが、理論的で効率の良いトレーニングができると考えられる。これまで、そういった場を提供できなかった為に、優秀な長距離ランナーを見逃してきたのではないかと。また、中学や高校の一部の部活動においては、勝利至上主義になりすぎて純粋に陸上長距離を実践するという機会を与えてこなかった可能性がある。そういったことを考えると、いつでも誰でも、競技力を高める指導を受けられる組織、つまりランニングクラブが必要と考えて、2007年に4月に設立された『セカンドウィンド AC』と日本におけるランニング事情を調査して、純粋に競技者として人生を歩む人々の手助けをしていきたいと考え、研究テーマとした。新たな環境で活動する『セカンドウィンド AC』の今後のビジネスモデルを探っていきたい。

(研究方法)

2007年2月にランニングにおける大きな出来事があった。それは先進国を含め、世界の国では、当然のように行なわれてきた都市型市民マラソンレースが、東京でも始まったことである。ランニングを新たなステ

ージへと導き出し、可能性を広げたのではないかと感じている。そういった時期に、オリンピックを狙う選手とサポーターや一般市民ランナーとが共にクラブを支えていこうとするクラブチームの誕生が、『セカンドウィンド AC』であり、今後の活躍を期待する意味で、ランニングに関する様々な観点から調査研究を行なう。

(研究項目)

- 活動拠点である東京圏の市場調査
- 東京マラソンにみるランニング事情の調査
- 日本社会におけるマーケット予測
- 競技者を育成するシステムづくり
- 今後のクラブのビジネスモデルの構築

(ミッション)

現代社会における文明の近代化、交通機関の発達、食生活の変化、生活習慣病などの増加によって様々な問題が叫ばれている。学校や職場においては、精神的なストレスの増加により、人間関係までもが困難になっている。そういった中で、手軽な運動の必要性が重要視されるようになってきた。また、陸上長距離の選手育成システムも、実業団や学校の部活を中心に日本では行われてきたが、そのシステムもこれからの経済のグローバル化を考えると、疑問を持たざるを得ない。陸上競技者育成とランニングを楽しむランナーが共にクラブを支え、発展させることが必要不可欠だと考える。

首都圏や地方都市においては、健康志向の高まりからフィットネスクラブの店舗数の増加や、公共スポーツ施設の民間委託などによる利便性向上が図られている。そうした中、忙しい現代人において気軽に運動できるのが、ウォーキングやランニングである。それによって日々の生活が、充実したものになるよう提案していきたい。

(ビジョン)

これまでの実業団にはない、トップ選手と一般市民ランナーが、共同してクラブの輪を広げていく。そのためには、人と人とのつながりを大切にして、コミュニティとしての場を充実させていくことによって、記録向上や健康、美容を目的にするあらゆる人に“Running Life”を楽しんでもらう。

- オリンピックを狙える選手の育成
- 物質的豊かさから⇒心の豊かさの時代へ
- ランニングを通して交流の輪を広げる

